沖縄出土の清朝陶磁

Quing Ceramics Unearthed in Okinawa

新垣　力
ARAKAKI Tsutomu

ABSTRACT：In the Early-Modern period Japan, Okinawa was one of the rare areas that had continued to carry out the trade with China since the preceding period. As a result, a large quantity of the Quing-dynasty ceramics had been brought into the Ryukyu archipelago. The Quing-dynasty ceramics are included in almost all the archaeological sites in Okinawa, proving that the trade with China at that time was quite active. Such ceramics were produced in the southern districts of China such as the Fujian and Guangdong provinces, as well as the ceramics found from the sites of the 14th- 16th century. This fact should dedicate to the study of Okinawa cultural history that had a close relation to the southern China.

1．はじめに

鎖国体制下にあった近世日本の中で、沖縄は前代に引き続き対中貿易を行っていた数少ない地域である。そのため中国清朝の陶磁器が大量に出土しており、分布も南西諸島の全域に広がっている。

本稿は沖縄出土の清朝陶磁の産地・器種・年代などを分析し、それから推定される歴史的及び文化的背景について考察するものである。なお、今回は明末清初と称される王朝交代に伴う動乱期（16世紀末～17世紀前半）の陶磁器も対象とする。

2．研究抄史

まず清朝陶磁に関する研究の変遷について、日本本土と沖縄の双方を比較しながら概観する。日本本土の様相は鈴木裕子氏（鈴木1999）や堀内秀樹氏（堀内2001）らがまとめているが、両氏とも清朝陶磁の研究が遅れた要因として、前代（明代）の陶磁器と比して出土量が減少したこと、国産磁器との判別が困難であったことなどを挙げている。この状況は沖縄にもほぼ通じるが、沖縄では早い時期から清朝陶磁の存在自体は知られていたようである。すでに1937年には山里永吉氏が宮古島出土の「安南で焼造されたと思われる茶碗」を報告しており（山里1937）、これが現在でいう福建・広東系の粗製染付碗に相当するものと思われる。

戦後、考古学の研究対象が中世や近世へと広がるにつれて、沖縄でも当該分野の研究が活発化していった。1963年から沖縄学生文化協会が開始した村落総合調査では、清朝陶磁までを対象とした考古学調査が実施され（沖縄学生文化協会1972ほか）、1975年に東京国立博物館で開催された「日本出土の中国陶磁展」には、八重山諸島の古墓から出土した清朝磁器が４点出品され、全国の注目を浴びた（東京国立博物館1976）。また1978年には、上記の清朝磁器を含めた八重山諸島出土の貿易陶磁を大浜永亘・関口広次の両氏が紹介しているが、その中で関口氏は沖縄は近世以後も中国陶磁が大量に出土すること、産地は景徳鎮よりも福建や広東の製品が多いと思われること、湧田窯及び壺屋窯の碗が清朝陶磁を模倣していると思われることなどを指摘している（大浜・関口1978）。その後も全国的に資料の蓄積が進み、沖縄では湧田古窯跡（沖縄県教育委員会1993）などをはじめとした近世遺跡の発掘調査報告書が相次いで刊行されている。また沖縄を含む九州出土の清朝陶磁も大橋康二氏によりまと

められ（大橋1995）、近世における沖縄の特殊性が改めて示されている。そして1998年には、「清朝陶磁をめぐる諸問題」と題した日本貿易陶磁研究集会が開催され（日本貿易陶磁研究会1998）、ここに清朝陶磁研究は一応の到達点を迎えている。

一方、生産地である中国での窯跡調査も並行して実施されている。1990年代初頭から日中の共同研究で開始された福建省漳州窯の発掘調査では、従来「呉須手」または「スワトウ・ウェア」などと呼ばれた製品の産地が漳州窯と判明し、関係者の耳目を集めた（森村1995、福建博物館1997）。他に中国側の研究としては、陳建中氏による福建省徳化窯採集染付の紹介が挙げられる（陳1999）。これにより類例が多数追加され、日本出土資料の産地も明らかになりつつある。

3．産地別にみる清朝陶磁の様相

清朝陶磁は様々な視点からのアプローチが可能だが、今回は生産地を主要素とした分類を試みる。沖縄出土資料を産地別に分類すると、①景徳鎮窯系陶磁器、②徳化窯系磁器、③漳州窯系磁器、④福建・広東系磁器、⑤その他の陶磁器の５種類に大別され、それぞれが器種や年代などの点でも特徴的な様相を呈している。以下にその詳細を記す。

①景徳鎮窯系陶磁器（第１図）

江西省景徳鎮窯及びその周辺諸窯を産地とするもので、染付・褐釉染付・色絵・白磁・三彩が確認されている。器種は碗や小碗などの飲食器が中心で、首里城跡などの特殊な遺跡や古墓からの出土が目立つ。年代は染付・色絵・白磁が18世紀後半～19世紀、褐釉染付が17世紀後半～18世紀前半、三彩が17世紀後半にそれぞれ位置付けられるが、染付小杯の一部（12、13）は17世紀代に相当すると考えられる。

染付（１～26）

１～５が碗、６～11が小碗、12～18が小杯、19が皿、20と21が小瓶、22～26が散蓮華である。碗はＡ類：端反口縁（１、２）、Ｂ類：外反口縁（３、４）、Ｃ類：直口口縁（５）に分類される。Ａ類は外面と内底に白抜きの菊唐草文、外底に双魚文？を描く。Ｂ類は外面に牡丹唐草文とラマ式蓮弁文、内底に花唐草文または花卉文を描き、外底に字款を施す。Ｃ類は外面と内底に菊唐草文、外底に字款を施す。いずれも出土量は多くないが、数的にはＢ類がやや優位とみられる。小碗も碗と同様にＡ類：端反口縁（６～９）、Ｂ類：外反口縁（10）、Ｃ類：直口口縁（11）に分類される。Ａ類は外面文様が雷文？とラマ式蓮弁文（６）、龍文と花唐草文の組み合わせ（７）、菊唐草文（９）、両面に仙芝祝寿文を描くもの（８）などがある。Ｂ類とＣ類の文様は碗のそれと類似する。小碗は碗に比して出土例が多く、中でも９と10が大半を占める。またＢ類は長崎県万才町遺跡（長崎市埋蔵文化財調査協議会1996）、Ｃ類は鹿児島県若宮（神社）遺跡（鹿児島県教育委員会1999）などからも出土している。小杯はＡ類：外反口縁（12～14）、Ｂ類：八角杯（15）、Ｃ類：腰の張る直口口縁（16）、Ｄ類：碁笥底（17、18）に分類される。Ａ類は外面に魑龍文を描くもの（12）、外面に飛馬文、内底に荒磯文を描くもの（13）、外面に薄文を描くもの（14）がある。Ｂ類は外面面取り部分と内底に花文を描く。Ｃ類は外面に簡略化された草花文を描く。Ｄ類の外面文様は飛馬文（17）、花唐草文（18）がある。小杯は古墓から集中して出土しており、特に13と16が多く確認される。19は端反口縁の浅皿で、外面に花卉文、内底に牡丹文を描き、外底に字款を施す。文様は碗Ｂ類や小碗Ｂ類にほぼ類似する。遺跡からの出土例よりも伝世品（瑞慶山1994）に多く見られる資料である。20と21は胴部が球形の小瓶で、外面に山水文や花文を描く。出土例は少ない。22～26は散蓮華で、長崎や江戸でも確認される。内面の

文様は花文（22）、唐草文（23～25）、蔓草文？（26）などがある。いずれも景徳鎮窯産と思われるが、徳化窯産の可能性もある。

褐釉染付（27、28）

褐釉染付は小碗（27）と小杯（28）がある。27は内面口縁部に四方襷文を廻らせる。内底の文様の有無は不明。28は内底に山水文を描き、外底に字款を施す。褐釉染付は染付小杯と同様に古墓からの出土例が多く、器種もほぼ小杯に限られる。類例は出島和蘭商館跡（長崎市教育委員会2002）や、またインドネシアのバンテン・ティルタヤサ遺跡（バンテン遺跡研究会2000）などで確認されている。

色絵（29）

29は小杯で、外面に蝙蝠文？を描く。これ以外にも蓋付碗や粉彩を施したものがあるが、いずれも首里城跡などの特殊な遺跡からの出土で、他の遺跡からの出土例は極めて少量である。

白磁（30～32）

白磁は30～32に示す小杯が出土している。器形や出土傾向は染付小杯にほぼ準じる。だが出土量は染付に比して少なく、器種もバリエーションに乏しい。

三彩（33）

33は両面に緑釉・黄釉・透明釉を施釉する三彩である。小片のため器形は不明だが、バンデン・ティルタヤサ遺跡出土の類例資料（バンテン遺跡研究会2000）から内湾口縁の小皿と思われる。沖縄では首里城跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2001a）で１点確認されている。

②徳化窯系磁器（第２図、第３図）

福建省徳化窯及びその周辺諸窯を産地とするもので、染付・色絵・白磁・瑠璃釉が確認されている。遺跡の性格に関わらず沖縄で最も多く出土する資料で、器種は景徳鎮窯系の製品と同様に碗・小碗・小杯などの飲食器を中心とする。年代はほぼ18世紀に収まるが、型成形の小形品は19世紀中頃まで下ると考えられる。また白磁小杯の一部（60～63）は、17世紀後半まで遡る可能性がある。

染付（第２図、第３図34～41）

１～16が碗、17～25が小碗、26～30が小杯、31～33が小皿、34～40が皿、41が壺である。碗はＡ類：端反口縁（１～８）、Ｂ類：直口口縁（９～14）、Ｃ類：型造りの直口口縁（15、16）に分類される。Ａ類は外面に草花文（１、２）、寿字文と散らし梅花文（３、４）、と散らし梅花文と龍濤文（５）、龍濤文（６）、仙芝祝寿文（７）などを描く。８は両面に仙芝祝寿文を描く。１や６のように外面腰部に蓮弁文を描くものもあるが、ほとんどは簡略化されるか無文となる。外底は「和美」などの銘を施すもの（３、４）もみられる。Ｂ類は外面に寿字文とアラベスク文？（９、14）、鳳凰文？（10）、菊唐草文（11、13）、丸文と蝙蝠文？（12）などを描く。９の外底には銘らしきものがみられる。Ｃ類は口唇部と畳付を釉剥ぎするもので、15は外面口縁部に斜格子文と魚文？を廻らせ、胴部に宝文と芭蕉文を描く。16は外面に寿字文と花卉文を描く。碗は１～４を中心にほとんどの近世遺跡でみられるが、Ｃ類は古墓からの出土例が比較的多い。小碗はＡ類：外反口縁（17～19）とＢ類：型造りの直口口縁（20、21）に分類され、それぞれの器形は碗Ａ類と碗Ｃ類に類似する。Ａ類は外面に線描きのみの牡丹唐草文（17、18）や梵字文（19）を描く。18のように外底に「成」の銘を施すものもある。Ｂ類は外面に梅文と芭蕉文（21）、山水文（22、25）、草花文？（24）などを描く。20と23は碗Ｃ類の文様に類似する。小碗は20や21が古墓で散見される程度で、碗に比して出土例は少ない。小杯はＡ類：直口口縁（26、27）とＢ類：型造りの直口口縁（28～30）に分類される。Ａ類は両面に雲龍文（26）や、外面に唐子文（27）などを描く。Ｂ類は外面に花卉文（28）、襷文（29）、梵字文（30）などを描

く。出土傾向及び出土量は小碗と似た様相を示す。小皿はA類：端反口縁（31）とB類：型造りの端反口縁（32、33）に分類される。A類は内底に線描きのみの牡丹唐草文を描き、外底に字款を施す。B類は内底に文様を描くもの（32）や、両面に仙芝祝寿文を描くもの（33）がある。33は鹿児島県坊津町泊浜からも採集されているが（橋口1998）、小皿自体の出土例は沖縄では少ない。皿はA類：端反口縁（34～38）とB類：直口口縁（39、40）に分類される。A類は内底に草花文（34）、「志在書中」図（35）、蓮池寿石文（36）、龍濤文（38）を描くものや、内面に仙芝祝寿文を描くもの（37）などがある。外底には、碗と同様に「和美」や「成美」などの銘がみられるものもある。B類は内面に梵字文を描くもの（29）と、両面に雲龍文を描くもの（30）がある。皿の出土例は小皿よりも多く、特に34や35は伝世品でも確認されるが（宮城1981）、それでも碗類と比べると各段に少ない。41は大形の短頸壺で、外面に菊唐草文を描く。銘苅古墓群（那覇市教育委員会1998）で出土している資料である。

色絵（第3図42～55）

色絵は碗・小碗・小杯・皿・小皿が確認されているが、それぞれの器形の特徴は染付に準じる。碗はA類：端反口縁（42～47）とB類：直口口縁（48、49）に分類される。A類は外面に寿字文と花文（42、45）、寿字文と蝙蝠文（44）、菊文（46）、鳳凰文？（47）などを描く。B類は外面に雲龍文？（48）や草花文（49）を描く。小碗は型造りの端反口縁で、外面に百寿文？（50）や草花文（51）を描く。52は外底に「瑞」の逆文字を施す。小杯（53）は型造りの直口口縁で、外面に花卉文？を描く。54は端反口縁の皿で、内面に文様を描く。小皿（55）は型造りの端反口縁で、内面に寿字文？を描く。色絵の出土量は染付に比して非常に少なく、分布も首里城跡などの一部の遺跡に偏る。器種別にみると碗A類の出土が最も多く、小杯や小碗が古墓出土資料としてこれに次いでいる。

白磁（56～63）

白磁は小碗と小杯を図示した。小碗は端反口縁（56）と直口口縁（57）があり、いずれも型造り成形である。両面とも文様は見られない。小杯もすべて型造り成形だが、直口口縁（58、59）や外反口縁（63）、八角杯（60、61）や碁笥底の外反口縁（62）、など、器形に多様なバリエーションがみられる。またこれ以外に、染付小皿B類や色絵小皿と同形の小皿も出土している。白磁の出土量は色絵よりもさらに少ないが、古墓出土資料には小杯が一定量確認される。

瑠璃釉（64、65）

瑠璃釉は小碗（64）と小杯（65）が出土している。いずれも型造りの直口口縁で、口唇部と畳付を釉剥ぎしている。瑠璃釉も色絵や白磁と同様に、徳化窯系製品全体に占める量は少ないが、やはり小杯が古墓を中心に確認される。

③漳州窯系磁器（第4図）

福建省漳州窯及びその周辺諸窯を産地とするもので、染付と白磁が出土している。器種は碗・皿・鉢・盤・馬上杯などが確認されているが、器種に関わらず集落遺跡での出土例は少なく、首里城跡などの特殊な遺跡に集中する傾向がみられる。また出土量も一般に少ないため、優品としての性格が窺える資料である。年代は16世紀末～17世紀前半のいわゆる明末清初期に相当するが、皿の17や18は16世紀後半～16世末頃に遡ると考えられる。

染付（1～24）

1～13が碗、14～19が皿、20と21が鉢、22と23が大皿、24が馬上杯である。碗はA類：成形の丁寧な直口口縁（1～6）とB類：轆轤目の残る直口口縁（7～13）に分類される。A類は外面に波濤文？（1）や花文（2、3）を描くものや、圏線を廻らせるもの（5、6）があるが、いずれも文様が簡

略化され判然としない。内底には捻花文（1）や宝文（4）を描くものも見られる。B類は内底及び外面腰部以下を露胎とするもので、外面に花唐草文（7～10）、豹皮状文（11、12）、花卉文（13）を描く。碗は漳州窯系磁器全体でも最も多く出土しており、特にB類が集落遺跡や古墓などで散見される。皿はA類：直口口縁（14～17）とB類：碁笥底の直口口縁（18、19）に分類される。A類は内面に蔓唐草文（14、15）や四方襷文（16）を廻らせるもので、内底には「玉」や「禄」の銘（14、16）や蓮鷺文（17）などがみられる。B類は内底に二重圏線で囲まれた寿字文を配するもので、類例が根来寺坊院跡（森村1995）などで出土している。皿は出土例が少なくほとんど確認されないが、B類に関してはグスク時代出土の染付碁笥底皿に混在している可能性がある。20と21は腰部の強く張る直口口縁の鉢で、外面に蓮池水禽文（20）や花文（21）を描く。内底には蓮鷺文を描くもの（20）がみられる。鉢は首里城跡などの特殊な遺跡のみで確認されるもので、出土量も非常に少ない。大皿（22、23）はいわゆる芙蓉手と呼ばれるもので、区画の施された内面に花卉文などを施す。出土例及び出土状況は鉢と似た様相を示す。24は外面と内底に花卉文を描く馬上杯で、古墓からの出土例が知られる資料である。

白磁（25）

白磁は端反口縁を呈する粗製の碗が確認されている。ヤッチのガマ（沖縄県立埋蔵文化財センター2001c）からの出土資料だが、他の遺跡での出土はほとんどみられない。

④福建・広東系磁器（第5図）

具体的な生産地は不明だが、福建省や広東省などの中国南部地域が想定されるもので、染付と白磁が出土している。器種は碗・小碗・小杯・皿・鉢・壺が確認されているが、その中でも碗類は遺跡の性格を問わず、一定量の出土がみられる。年代は17世紀～18世紀に収まるが、染付碗はA類が17世紀、B類が17世紀末～18世紀前半、C類が18世紀にそれぞれ位置付けられる。

染付（1～25）

1～12が碗、13～17が小碗、18～21が小杯、22と23が皿、24と25が鉢である。碗はA類：成形の雑な直口口縁（1～5）、B類：Aに比して成形の丁寧な直口口縁（6～9）、C類：腰部がやや丸みを帯びる直口口縁（10～12）に分類される。A類は内底及び外面腰部以下を露胎とするもので、外面に文様を描くがいずれも抽象的で判然としない。B類は内底に蛇の目状に釉を塗布するもので、外面に菊花文（6）、団龍文？（7）、圏線（8）、草文？（9）を描く。C類は内底を蛇の目状に釉剥ぎするもので、外面に丸文（10、11）や魑龍文？（12）を描く。徳化窯系製品の可能性も考えられる。碗は前述の通り最も普遍的な器種で、特にB類が多く確認される。またB類は大阪城下町跡（森1995）でも出土している。小碗はA類：直口口縁（13～15）とB類：端反口縁（16、17）に分類される。A類は外面に菊花文（13）、花卉文（14）、花唐草文？（15）を描く。15は漳州窯系製品の可能性もある。B類は外面に菊唐草文？（16）や花卉文（17）を描く。いずれも古墓からの出土資料だが、出土例は非常に少ない。小杯はA類：端反口縁（18、19）とB類：型造りの端反口縁（20、21）に分類される。A類は内底に兎文（18）や宝文？（19）を描く。B類は外面に点描文と花唐草文と組み合わせた文様を描くもので、徳化窯系製品の可能性も考えられる。小杯は量的に多くはないが、B類が古墓を中心として確認される。皿は22と23の2点を図示した。22は直口口縁を呈するもので、内面に唐草文？を描く。23は腰部が張る直口口縁の皿で、内面に圏線を廻らす。いずれも出土例及び出土量は極めて少ない。24と25は端反口縁の鉢で、内底に蛇の目釉剥ぎを施す。外面に寿字文（24）や牡丹唐草文？（25）が描かれ、内底にはスタンプによる銘が施されるものもある。双方とも出土例は少ないが、24

は多くの近世遺跡で散見される資料である。

白磁（26～30）

26と27が碗、28が皿、29が壺、30が小杯である。碗は直口口縁（26）と外反口縁（27）があり、26は内底に蛇の目状釉剥ぎを施し、27は内底に目跡が４ヶ所確認される。皿は碁笥底の直口口縁で、内底及び外面腰部以下を露胎とする。28は外面に明瞭な稜を持つ短頸の壺で、安平壺とも呼ばれる資料である。小杯は型造りの端反口縁のもので、染付小杯Ｂ類と同様の器形である。白磁は壺が天界寺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2001b）などで確認されているが、全体として古墓からの出土が目立つ。しかし出土量は非常に少ない。

⑤その他の陶磁器（第６図）

生産地が前記のいずれにも該当しないもの、または生産地が判然としないものをここに一括して紹介する。１は端反口縁を呈する青磁染付の小碗で、内面に八卦文と太極図を描き、外底に字款を施す。量的に多くないものの、遺跡の性格を問わず出土が確認される資料である。産地は不明だが、景徳鎮窯系製品の可能性がある。年代は18世紀後半～19世紀前半と考えられる。２～10は江蘇省宜興窯及びその周辺諸窯を産地とする陶器で、急須（２～７）・碗（８）・小杯（９、10）が出土している。急須はＡ類：胴部下位に最大径を持つ小形品（１）、Ｂ類：筒形（３～６）、Ｃ類：肩部に稜を持つ大形品（７）に分類される。Ａ類は外底に「荊溪陳子文製」の銘を施す。Ｂ類は外面に貼付や盛上げによる文様を施す。Ｃ類は全体的に成形が粗雑なため、清朝陶磁のコピーを生産していた常滑焼や万古焼などを産地とする可能性もある（扇浦1999）。８は端反口縁の碗で、両面に盛上げによる文様を施す。９は直口口縁を呈するもので、外面に雷文帯を廻らせる。10は花弁形に面取りされた小杯で、外面に獣面形の耳を一対貼付する。宜興窯系陶器は首里城跡や古墓などで少量出土しているが、伝世品として確認される例（宮城1981）が全国的にも多い。年代は17世紀後半を上限とするが、おそらく清代（17世紀後半～19世紀）を通じて生産されていたものと思われる。11～17は銅緑釉を施釉する軟質の陶器で、酒会壺（11～16）と鉢（17）が確認されている。酒会壺は蓋及び身の外面に型押しによる蓮弁文を施す。17は小片のため全形は不明だが、上面観が八角形を呈する植木鉢と思われる。銅緑釉陶器は出土量も少なく、分布も首里城跡などの一部の遺跡に限られるため不明な点が多い。ただ素地の特徴から、明代の華南彩釉陶と同様に中国南部地域で生産された可能性が高いと思われる。

４．まとめと今後の課題

以上、沖縄出土の清朝陶磁を産地別に分類し、それぞれの器種組成や年代について概観した。それにより、福建省や広東省などの中国南部地域を産地とするものが多いこと、器種は碗・小碗・小杯などが大半を占めること、遺跡の性格に関係なく広範に出土すること、年代は産地別に差異はあるが、広く近世を通じて生産・輸入されていたことなどの特徴が確認され、以前からの指摘を補強する結果となった。特に産地の偏りについては、グスク時代後半頃（14世紀～16世紀）出土の陶磁器群にも類似の様相がみられるため、福建省と深いつながりを持つといわれる沖縄の文化史研究にも、多くの示唆を与えるものと考えられる。

今後の課題としては、清朝陶磁と沖縄産陶器との影響関係などが挙げられる。今回は資料紹介と問題点の整理のみに終始したため、いずれ稿を改めて論じたい。また今回実施した清朝陶磁の分類や年代の設定にも、筆者の誤解や認識不足な点があるかと思われる。先学諸氏の御指導及び御批判を戴ければ幸いである。

（あらかき　つとむ：調査課　嘱託員）

引用文献

大橋康二　1995　「九州における明末～清時代の中国磁器の出土分布とその内容について」『青山考古』第12号　青山考古学会

沖縄学生文化協会　1972　『郷土－本部備瀬集落・第三次宮古島調査報告－』第11号　沖縄大学沖縄学生文化協会

沖縄県教育委員会　1993　『湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001a　『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』　沖縄県立埋蔵文化財センター

〃　2001b　『天界寺跡（Ⅰ）』　沖縄県立埋蔵文化財センター

〃　2001c　『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』　沖縄県立埋蔵文化財センター

扇浦正義　1999　「長崎出土の清朝陶磁」　『貿易陶磁研究』№19　日本貿易陶磁研究会

大浜永亘・関口広次　1978　「八重山群島出土の古陶磁について」　『物質文化』№31　物質文化研究会

鹿児島県教育委員会　1999　『若宮（神社）遺跡』　鹿児島県教育委員会

瑞慶山昇　1994　「久米島の陶磁器」　『久米島総合調査報告書－自然・歴史・民俗・考古・美術工芸・建築－』沖縄県立博物館

鈴木裕子　1999　「清朝陶磁の国内の出土状況－組成を中心に－」　『貿易陶磁研究』№19　日本貿易陶磁研究会

陳建中　1999　『徳化民窯青花』　文物出版社

東京国立博物館　1978　『日本出土の中国陶磁』　東京国立博物館

長崎市教育委員会　2002　『出島和蘭商館跡』　長崎市教育委員会

長崎市埋蔵文化財調査協議会　1996　『万才町遺跡』　長崎市埋蔵文化財調査協議会

那覇市教育委員会　1998　『銘苅古墓群（Ⅰ）』　那覇市教育委員会

日本貿易陶磁研究会　1998　『第19回日本貿易陶磁研究集会資料　清朝陶磁をめぐる諸問題』　日本貿易陶磁研究会

橋口亘　1998　「鹿児島県坊津町海岸採集の陶磁器」　『貿易陶磁研究』№18　日本貿易陶磁研究会

バンテン遺跡研究会　2000　『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書　東南アジア肥前陶磁日本シンポジウム』上智大学アジア文化研究所・国立考古学研究センター

福建博物館　1997　『漳州窯－福建漳州地区明清窯址調査発掘報告之一－』　福建人民出版社

堀内秀樹　2001　「中国貿易陶磁器研究の到達点－明・清代－」　『季刊　考古学』第75号　雄山閣

宮城篤正　1981　「渡名喜島の陶磁器」　『県立博物館総合調査報告書Ⅱ－渡名喜島－』　沖縄県立博物館

森毅　1995　「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」　『ヒストリア』149　大阪歴史学会

森村健一　1995　「福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年－いわゆる「福建・広東産青花」「スワトウ」「呉須手・赤絵」の窯跡陶片と日本の遺跡出土品の比較－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3　大阪府埋蔵文化財協会

山里永吉　1942　「琉球の陶業史」　『琉球の陶器』　昭和書房

図版作成に使用した報告書一覧

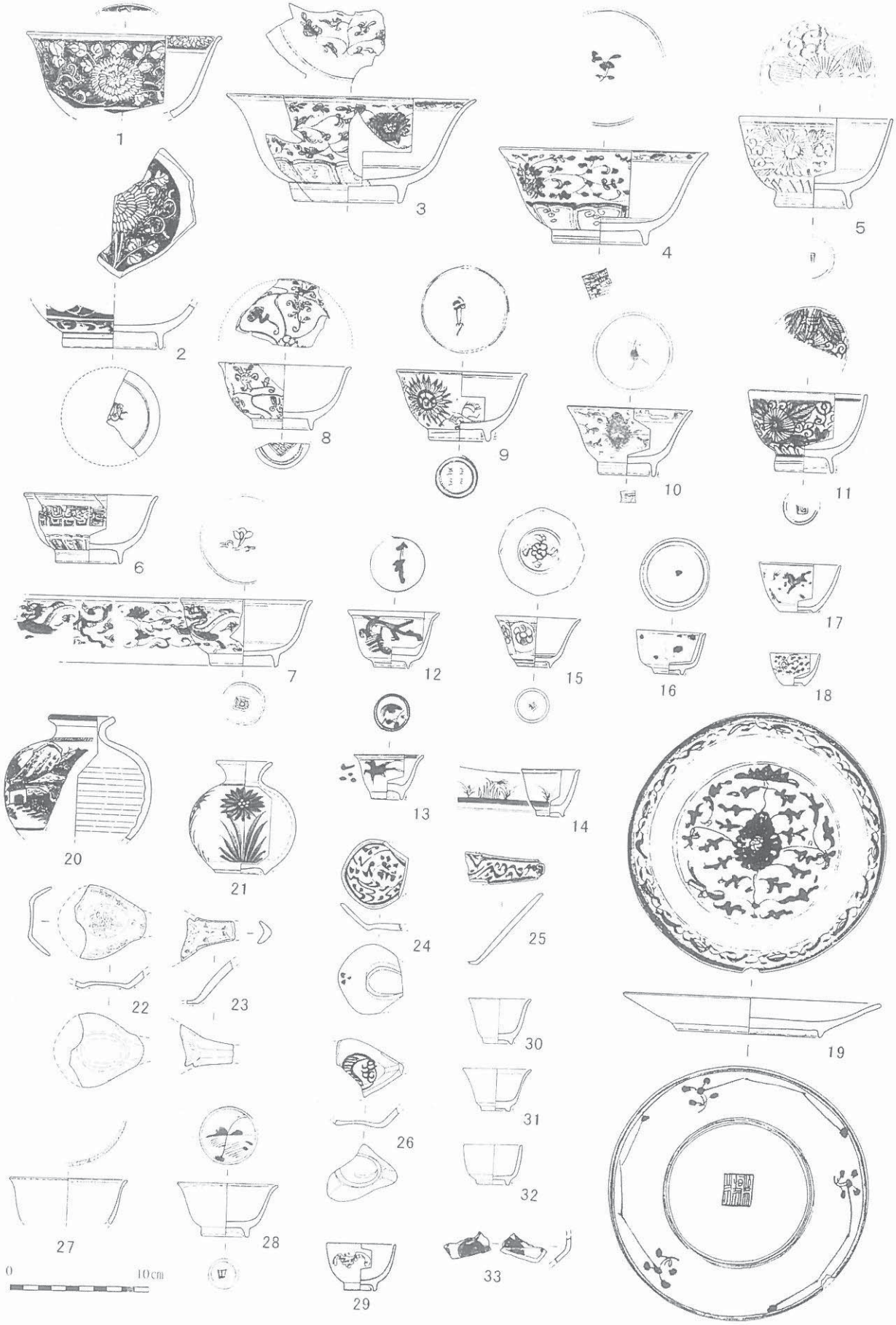
1．沖縄県教育委員会　1986　『松田遺跡』　沖縄県教育委員会

2．　〃　1995　『湧田古窯跡（Ⅰ）』　沖縄県教育委員会

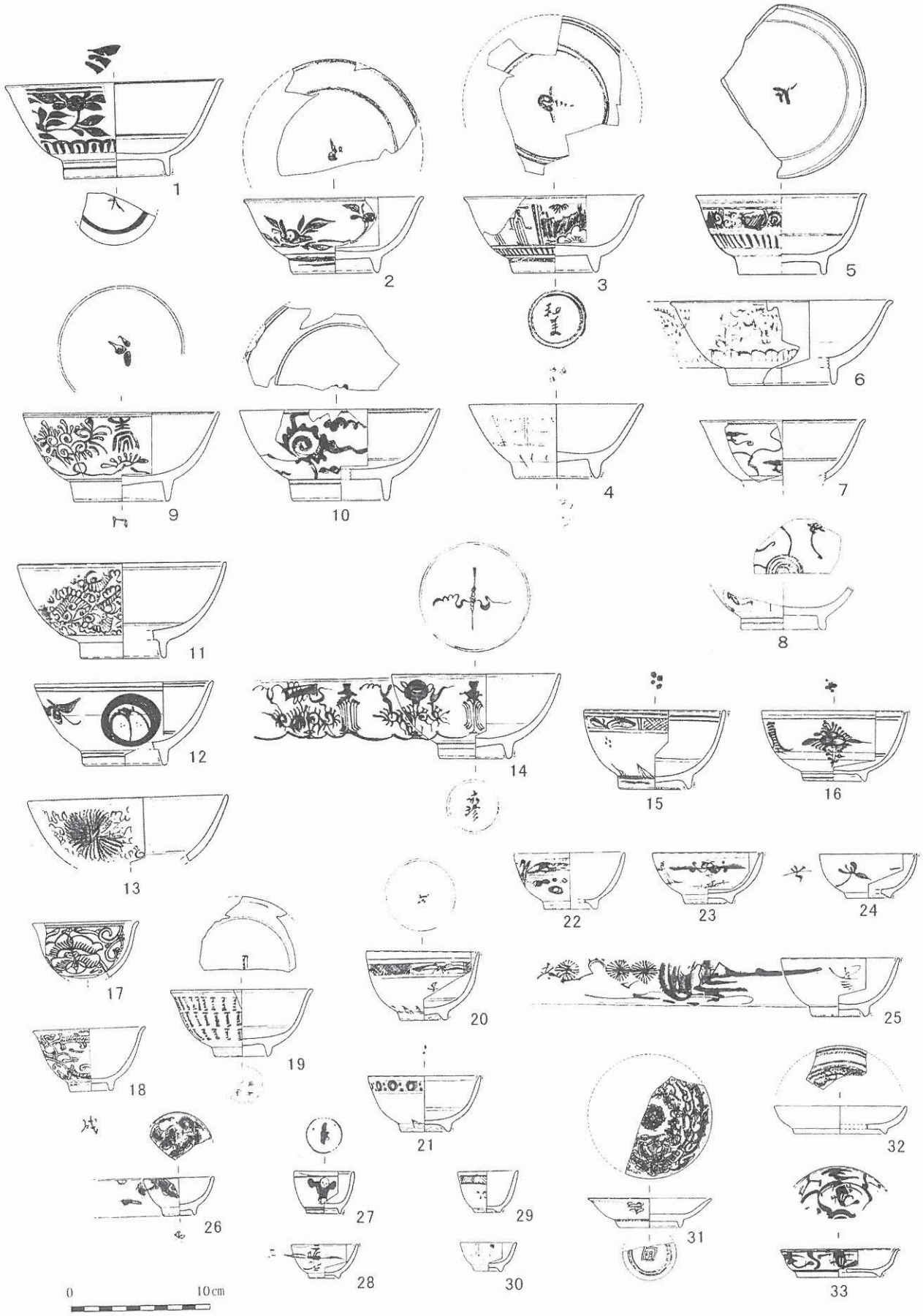
3．　〃　1997　『湧田古窯跡（Ⅱ）』　沖縄県教育委員会

4．　〃　1997　『慶来慶田城遺跡』　沖縄県教育委員会

5.　　〃　　1999　『喜友名貝塚・喜友名グスク』　沖縄県教育委員会
6.　　〃　　1999　『湧田古窯跡（Ⅳ）』　沖縄県教育委員会
7．沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』　沖縄県立埋蔵文化財センター
8.　　〃　　2001　『天界寺跡（Ⅰ）』　沖縄県立埋蔵文化財センター
9.　　〃　　2001　『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』　沖縄県立埋蔵文化財センター
10.　　〃　　2001　『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群』　沖縄県立埋蔵文化財センター
11.　　〃　　2002　『天界寺跡（Ⅱ）』　沖縄県立埋蔵文化財センター
12.　　〃　　2002　『新里元島上方台地遺跡・新里東元島遺跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター
13.　　〃　　2002　『首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－』　沖縄県立埋蔵文化財センター
14．名護市教育委員会　1988　『フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所跡遺跡・仲尾次上グシク遺跡』　名護市教育委員会
15．那覇市教育委員会　1998　『銘苅古墓群（Ⅰ）』　那覇市教育委員会
16.　　〃　　1999　『銘苅古墓群（Ⅱ）』　那覇市教育委員会
17.　　〃　　2000　『ナーチュー毛古墓群』　那覇市教育委員会

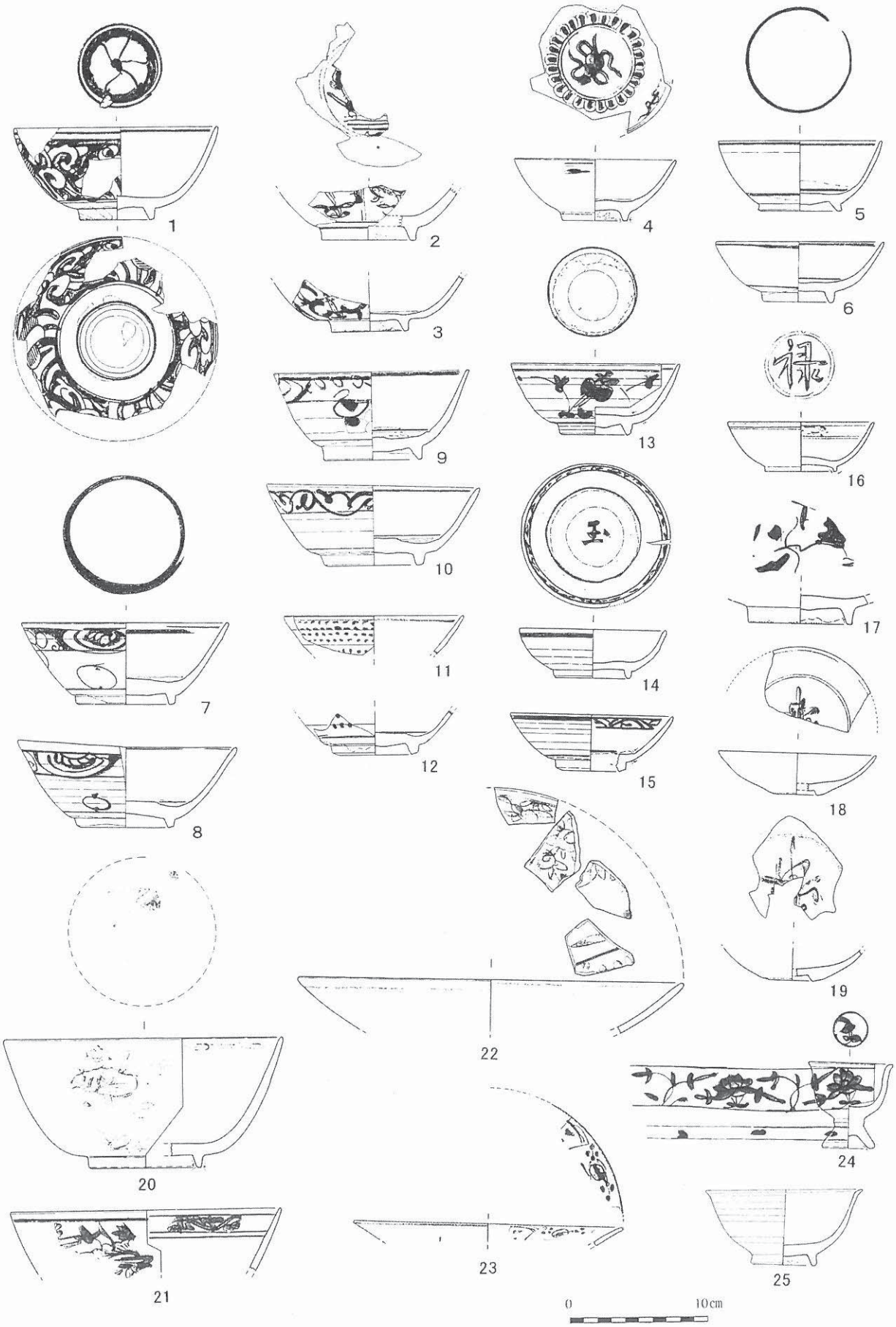


第１図　景徳鎮窯系陶磁器　染付（１～26）、褐釉染付（27、28）色絵（29）、白磁（30～32）、三彩（33）

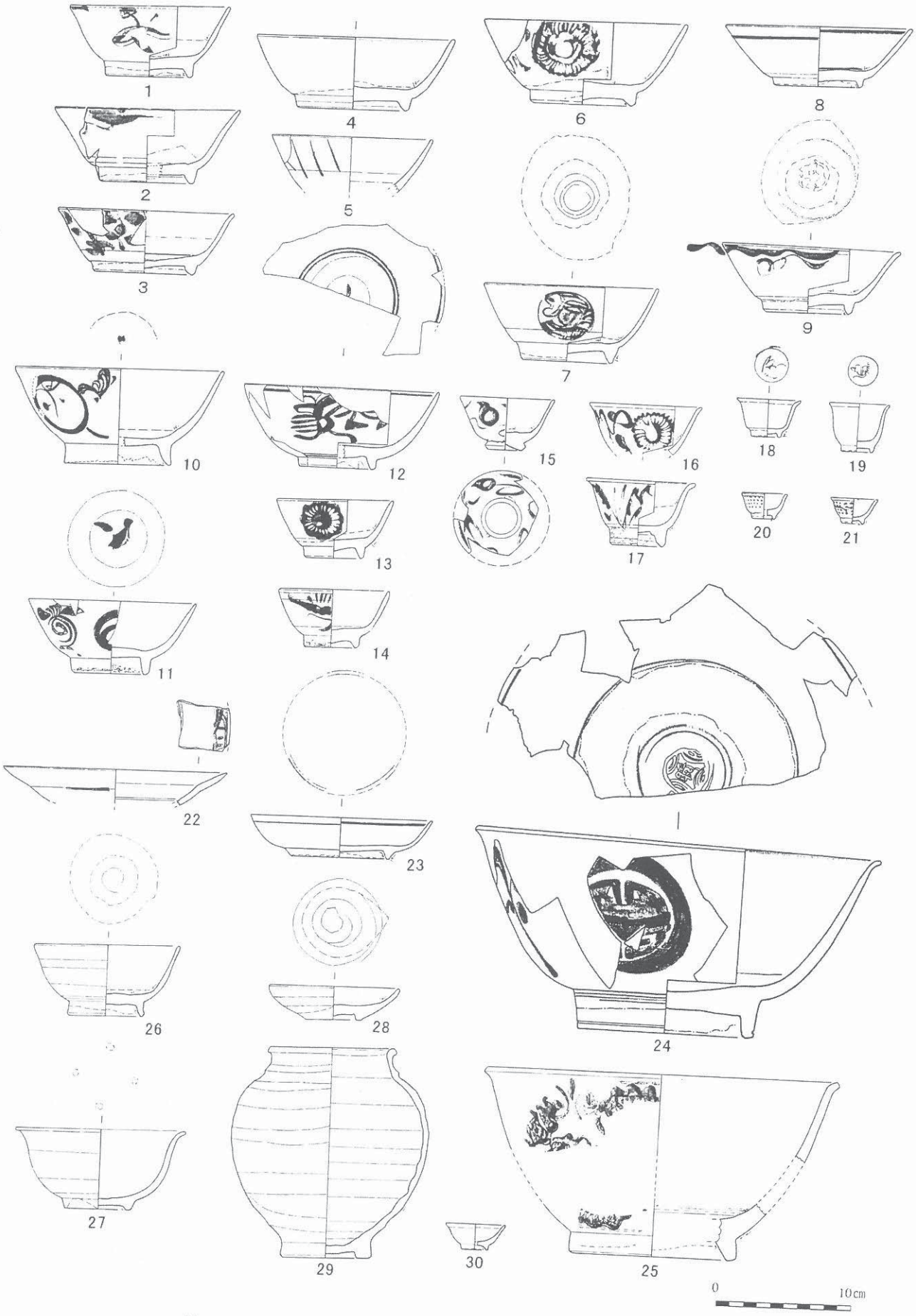


第２図　徳化窯系磁器　染付

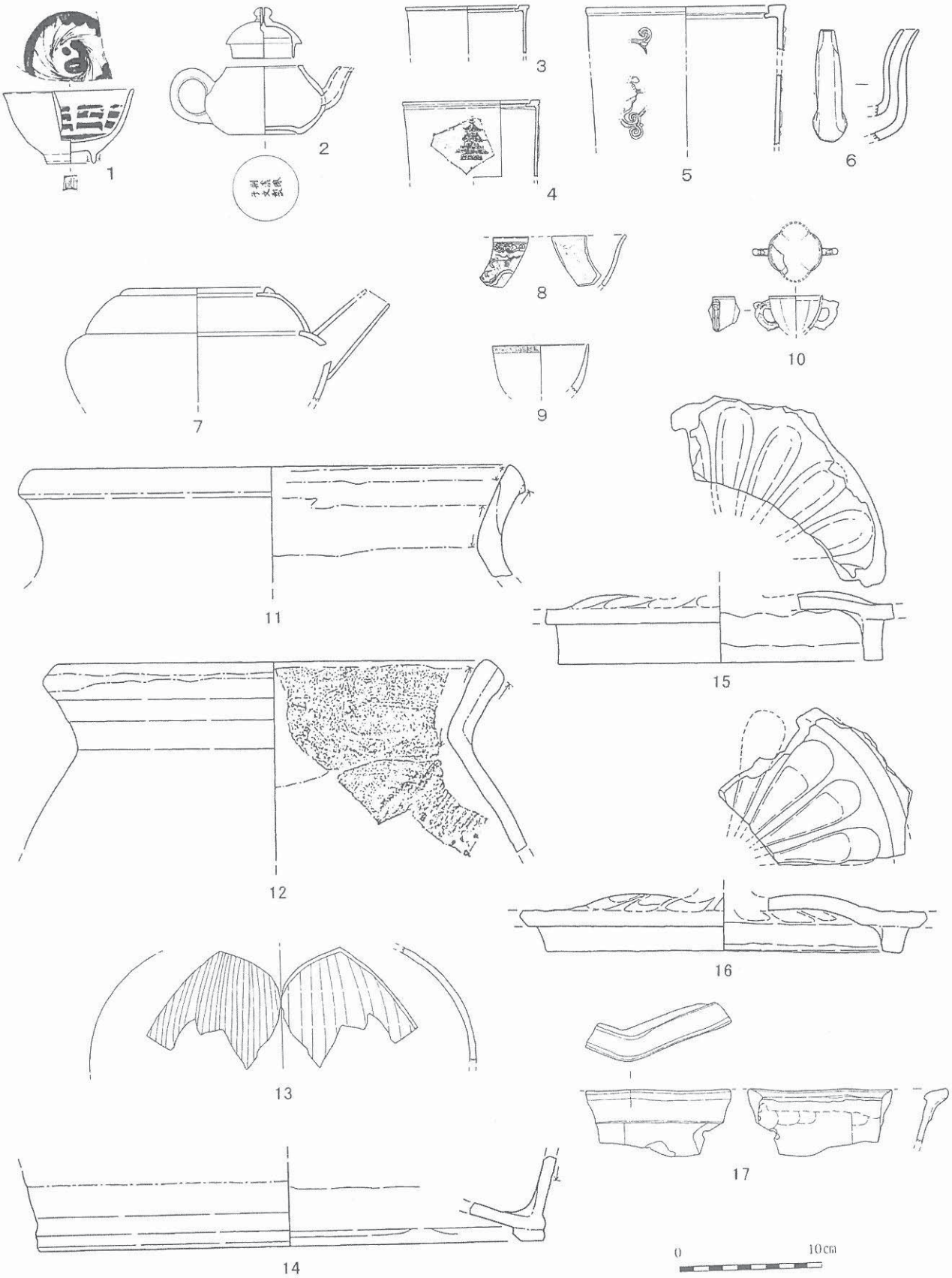
第３図　徳化窯系磁器２　染付（34～41）、色絵（42～55）白磁（56～63）、瑠璃釉（64、65）



第４図　漳州窯系磁器　染付（１～24）、白磁（25）



第５図　福建・広東系磁器　染付（１～25）、白磁（26～30）



第６図　その他の陶磁器　青磁染付（１）、宜興窯系陶器（２～10）、銅緑釉陶器（11～17）

表１　図版資料出土遺跡一覧

図	No.	遺跡名・地区名など	文献
第1図	1	新里東元島遺跡	12
	2	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	3	首里城跡（管理用道路地区）	7
	4	首里城跡（管理用道路地区）	7
	5	天界寺跡（東地区）	8
	6	首里城跡（管理用道路地区）	7
	7	首里城跡（管理用道路地区）	7
	8	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	9	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	10	天界寺跡（東地区）	8
	11	ヤッチのガマ	10
	12	ヤッチのガマ	10
	13	ヤッチのガマ	10
	14	カンジン原古墓群	10
	15	ナーチュ―毛古墓群	17
	16	ナーチュ―毛古墓群	17
	17	ヤッチのガマ	10
	18	銘苅古墓群（Ｄ地区）	16
	19	喜友名グスク（本土産磁器集中部）	5
	20	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	21	ヤッチのガマ	10
	22	天界寺跡（東地区）	8
	23	天界寺跡（東地区）	8
	24	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	25	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	26	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	27	天界寺跡（東地区）	8
	28	ヤッチのガマ	10
	29	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	30	ヤッチのガマ	10
	31	ヤッチのガマ	10
	32	ヤッチのガマ	10
	33	首里城跡（管理用道路地区）	7
第2図	1	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	2	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	3	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	4	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	5	松田遺跡	1
	6	首里城跡（管理用道路地区）	7
	7	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	8	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	9	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	10	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
第2図	11	天界寺跡（東地区）	8
	12	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	13	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	14	ヤッチのガマ	10
	15	新里東元島遺跡	12
	16	ヤッチのガマ	10
	17	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	18	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	19	首里城跡（管理用道路地区）	7
	20	ヤッチのガマ	10
	21	ヤッチのガマ	10
	22	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	23	ヤッチのガマ	10
	24	ヤッチのガマ	10
	25	ヤッチのガマ	10
	26	首里城跡（管理用道路地区）	7
	27	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	28	ヤッチのガマ	10
	29	ヤッチのガマ	10
	30	銘苅古墓群（Ｃ地区）	16
	31	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	32	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	33	天界寺跡（西地区）	11
第3図	34	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	35	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	36	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	37	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	38	首里城跡（管理用道路地区）	7
	39	慶来慶田城遺跡（Ｉ地区）	4
	40	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	41	銘苅古墓群（Ｅ地区）	15
	42	銘苅古墓群（Ｅ地区）	15
	43	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	44	天界寺跡（西地区）	11
	45	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	46	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	47	天界寺跡（東地区）	8
	48	天界寺跡（東地区）	8
	49	天界寺跡（西地区）	11
	50	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	51	天界寺跡（西地区）	11
	52	天界寺跡（東地区）	8
	53	カンジン原古墓群	10

表２　図版資料出土遺跡一覧

図	No.	遺跡名・地区名など	文献
第３図	54	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	55	湧田古窯跡（議会棟地区）	3
	56	天界寺跡（東地区）	8
	57	ヤッチのガマ	10
	58	天界寺跡（東地区）	8
	59	ヤッチのガマ	10
	60	ヤッチのガマ	10
	61	ヤッチのガマ	10
	62	天界寺跡（東地区）	8
	63	ヤッチのガマ	10
	64	首里城跡（継世門周辺地区）	13
	65	首里城跡（継世門周辺地区）	13
第４図	1	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	2	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	3	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	4	ヤッチのガマ	10
	5	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	6	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	7	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	8	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	9	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	10	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	11	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	12	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	13	ヤッチのガマ	10
	14	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	15	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	16	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	17	天界寺跡（西地区）	11
	18	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	19	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	20	天界寺跡（東地区）	8
	21	天界寺跡（東地区）	8
	22	天界寺跡（東地区）	8
	23	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	24	ヤッチのガマ	10
	25	ヤッチのガマ	10
第５図	1	新里東元島遺跡	12
	2	首里城跡（管理用道路地区）	7
	3	首里城跡（管理用道路地区）	7
	4	天界寺跡（東地区）	8
	5	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
第５図	6	田井等遺跡	14
	7	ヤッチのガマ	10
	8	ヤッチのガマ	10
	9	新里東元島遺跡	12
	10	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	11	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	12	湧田古窯跡（行政棟地区）	2
	13	ヤッチのガマ	10
	14	ヤッチのガマ	10
	15	ナーチュ―毛古墓群	17
	16	ヤッチのガマ	10
	17	ヤッチのガマ	10
	18	ヤッチのガマ	10
	19	ヤッチのガマ	10
	20	天界寺跡（東地区）	8
	21	ナーチュ―毛古墓群	17
	22	天界寺跡（東地区）	8
	23	天界寺跡（東地区）	8
	24	首里城跡（管理用道路地区）	7
	25	天界寺跡（東地区）	8
	26	ヤッチのガマ	10
	27	ヤッチのガマ	10
	28	ヤッチのガマ	10
	29	天界寺跡（東地区）	8
	30	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
第６図	1	羽地間切番所跡遺跡	14
	2	ナーチュ―毛古墓群	17
	3	首里城跡（管理用道路地区）	7
	4	首里城跡（管理用道路地区）	7
	5	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	6	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	7	湧田古窯跡（地下駐車場地区）	6
	8	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	9	天界寺跡（東地区）	8
	10	首里城跡（管理用道路地区）	7
	11	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	12	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	13	首里城跡（管理用道路地区）	7
	14	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	15	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	16	首里城跡（下之御庭跡ほか）	9
	17	首里城跡（管理用道路地区）	7